

劇団道化座第10次訪中公演

おやじ

中国話劇

作／申捷
演出／須永克彦

日時／2004年 3/28・29

会場／上海話劇芸術中心 戯劇沙龍



劇団道化座は、1987年に第1次訪中公演を行い、以来、アジアとの演劇交流に努めて参りました。

2004年3月、上海の上海話劇芸術センター・戯劇沙龍にて、中国話劇「おやじ」を上演。たった3回だけの公演でしたが、観客の皆さまの反応も素晴らしく、「中国人がやるより中国らしい舞台」とのお言葉も頂戴しました。

お陰さまで、10度目の訪中公演は大喝采のうちに、無事、幕を下ろすことができました。

その際の新聞評をここにご紹介させていただきます。

小劇場話劇『おやじ』

アジアの親と子に共通する想いー庶民生活を活写ー 齊師（『東方早報』記者）

日本の劇団道化座の現代劇『おやじ』が、上海話劇芸術センターで公演された。舞台は日本的風格を持つ写実的な造形で、大学で同級の青年二人の回想を挟み、それぞれの家族への想いを語る。父子二世代の交流だけでなく、都会と農村の貧富の隔たりがもたらす異なる苦境を映し出す。

『おやじ』の原産地は中国である。申捷／作の『おやじとパパ』を脚色したもので、もとは中央実験話劇院（現・中国国家話劇院）によって公演された。

道化座の代表、須永克彦氏は4年前に北京でこの劇を観た時、客席の多くの若者が流した涙に心動かされた。この作品を脚色した最大の動機は、アジアの父母と子供に共通する感情、日本にも存在する貧富の差の現実を反映している事にある。



道化座の脚色は原作を尊重している。表現方法は、より日本の観客の好みに合わせたと言える。劇中の語り手は二人の子供である。一人は元気だが情に飢えている都会の男の子、もう一人は生活は貧しいが丈夫で楽観的な農村の男の子だ。

劇の視点は農村生活の描写に力点がある。天に背を向けて黄土と向き合う老いた父親、父親の痲痺と暴力に耐える母親、天真爛漫で可愛い妹。農村生活の粗削りな逞しさを強調しているが、作品全体は重厚だ。

巨大なテーマがあるわけではない。しかし、舞台上には現実の生活が完全に再現されていた。それは小さなエピソードを重ねることで表現され、装飾は簡素である。

最も感動的なのは、農村生活の粗削りな描写にあった。——父親が酔ったあげくの母親との激しい言い争いや、あぜ道で母親と妹が涙ながらに兄を見送る別れの様子——、この素朴さに人は心に痛みを感じる。だが、父、母、妹にとって、長男の成長が唯一の喜びなのだ。人は貧困に嘆くことで錬磨すると同時に、喜びは手を伸ばせば届くと気づかされる。



農村の若者と比較すれば、両親が離婚した都会の若者は、物質の充足は必ずしも彼の心を満たしてはくれない。彼にとって父親は永遠に忙しく、遠く離れており、彼自身もまた、農村の夜空に微かに瞬いていた小さな星のように孤独である。

須永氏によれば、この農村の父親は日本の20～25年前のイメージだという。

彼にとって、この父親の感情と現実とは懐かしく、祖父たちの生きてきた苦勞を思わせるようだ。この劇は大人向けであるが、同時に歴史によって若者を教育するものでもある。苦しい生活の中での、素朴な家庭の情感とそこから得る喜びは、現代生活では今や埋もれてしまったと言える。

現在、上海の現代劇市場で、このような最も現実的で、普通の庶民生活を表現した演劇は最近とみに珍しくなった。演劇世界にも流行の大波が押し寄せ、英雄主義が現代劇市場に吹き荒れる中、今回の劇は、我々に真に新鮮な感覚を呼び起こしてくれた。（翻訳：田村容子）

